



**Robert Schumann: Complete
Symphonic Works, Vol. IV**

aud 97.717

EAN: 4022143977175



Record Geijutsu (2016.12.01)

Stille Empfehlung

Japanische Rezension siehe PDF!



新譜月評 協奏曲

The Record Geijutsu Disc Review The Record

岡部真一郎 ● Shinichiro Okabe

推薦 ホリガー指揮によるシューマンの協奏曲2曲は2015年の2月と3月にセッション録音されたもの。まず目を引くのが、ヴァイオリン協奏曲の共演者にコパチンスカヤを迎えていることだろう。彼女のソロは相変わらずのエッジの鋭さで、この作品に新たな光を当て、既存のイメージにとらわれることなく自由に感性を羽ばたかせている。大きな構造から見れば、独特の時間が流れる緩徐楽章と両端楽章との対比などは何よりそのアプローチの核となるところだろうし、一方ボウイング、アーティキュレーションなどのディテールから、各楽章の設計など至るところに彼女の個性の刻印は明らかだ。一方のピアノ協奏曲の演奏は1968年ブダペスト生まれのハンガリーのピアノリスト、演奏活動の傍ら母校リスト音楽院で教鞭をとるヴァーリオン。すでにホリガーとは彼の師であるヴェレシュのディスタックでの共演、あるいはECMでの作品集の制作などもあって、それらを踏まえての今回の起用というところか。第1楽章に典型的なように、存外すっきりとした見通しを保ちつつ、歌うところは存分に歌い、純度の高い詩情に満ちたシューマンを奏でている。作曲家、そして指揮者としてのホリガーの永年のシューマンへの並々ならぬ思い入れは、生き生きとしたリズムが印象的なヴァイオリン協奏曲終楽章をはじめ、初稿たる《幻想曲》をも視野に入れたピアノ協奏曲第1楽章など、オーケストラの扱いを含め、この協奏曲作品のディスクでも随所に見出されよう。

岡部真一郎 ● Shinichiro Okabe

推薦 別項と同様、ホリガー指揮の交響作品全集全6巻の一環。ケルンの西ドイツ放送制作の音源、2015年、同地の大聖堂や中央駅、ルートヴィヒ美術館などに隣接、ライン川沿いに建つフィルハーモニーで行なわれた録音である。いわゆるコンツェルトシュテュックを集めたアルバムだ。幕開け、作品134をはじめ、ピアノ独奏を務めるのは1960年生まれドイツのピアニスト、ECMに《クライスレリアーナ》とホリガー作品をカップリングしたディスクなどもあるロンクヴィヒ。2月の収録だ。作品92におけるパッサージュとクールな視線のバランスは、ホリガーの志向性とも響きあうところと見える。《幻想曲》は別項のヴァイオリン協奏曲と同じくピアノ作品に先立って録音されたもの。独奏はもちろん、コパチンスカヤである。しつとりとしたなかにも奥行き、そして絶妙な色合いのグラデーションが印象的だ。3月のレコーディング、ケルン、そして録音場所のフィルハーモニーにも縁のあるシンフォニーを想起させるフレーズも現れる4つのホルンのための作品86では、ケルン放送響の奏者たちが力の籠った演奏を聴かせている。一見したところいくぶん地味めではあるものの、「全集」ならではの選曲、そしてホリガーならではのアプローチが随所に見て取れる上、何よりここにはしっかりとした手応えを感じさせる内容の充実がある。ちなみにホリガーは先項、今年度の「ツヴィツカウ・シューマン賞」を受けている。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】1か月ほど間を置いて録られているが、音の違いは特になく、セッションだがライブ感を重視したような音作りで、オーケストラの音色は少し距離を置いて全体を俯瞰するような雰囲気。オーケストラ内のソロもさほどクローズ・アップされていない。またソロのヴァイオリン、ピアノとも少し距離を置いた集音でオーケストラとはよく溶け合う。高域の抜けが少々不足か。〈90〉



■シューマン：ヴァイオリン協奏曲／ピアノ協奏曲

ハインツ・ホリガー指揮ケルン西ドイツ放送交響楽団、パトリシア・コパチンスカヤ(vn)デーネシュ・ヴァールヨン(p)【アウディーテ◎KKC5662】 ¥3000



■シューマン：序奏とアレグロ／ヴァイオリンと管弦楽のための幻想曲／ピアノ小協奏曲（序奏とアレグロ・アダージョ）／4本のホルンと管弦楽のためのコンツェルトシュテュック

ハインツ・ホリガー指揮ケルン西ドイツ放送交響楽団、アレクサンダー・ロンクヴィヒ(p)パトリシア・コパチンスカヤ(vn)他【詳細は巻末新譜一覧表参照】【アウディーテ◎KKC5663】 ¥3000

相場○ ● Hiro Alba

推薦 ピアノ協奏曲は近年ホリガーとの共演の多いヴァーリオンが独奏を務める。第1楽章冒頭のあつさりとしたスフォルツァンドや、第1主題の快速のテンポ設定から明らかになように、ロマンティックに肥大し、あちこちでテンポを緩めてたつぷりと歌う演奏とは正反對に、引き締まった進行が目につく。ピアノ独奏は、速めのテンポの中できちんと旋律を歌わせたり、転調の緩やかなシークエンスの転換をきちんと際立たせたりと、豊かなニュアンスを込めていくが、私の強いヴィルトゥオーソ的音楽を聴かせるよりも、長大な分散和音の連続では管弦楽とのブレンドを優先させるなど、アンサンブルに強く意を用いた演奏となつている。指揮者ホリガーも、両端楽章でのコンパクトなコードのまとめ方など過剰なロマンを戒め、独奏との一体感を前面に出して進めていく意識が強い。その一方で、第2楽章では旋律の歌わせ方に思わぬ粘りを見せるなど、杓子定規に陥らない自在な振りをみせるのが興味深い。ピアノ協奏曲とは異なり、ヴァイオリン協奏曲でのホリガーは分厚い響きとティンパニの強打によって、冒頭からスケール感を打ち出した演奏となつている。コパチンスカヤの独奏はいくつもの抑えられた上で、凹凸の多いザラツとした質感の音色で、陰鬱の濃い歌を歌い継いでいく。両者共に西洋音楽らしい朗々とよく鳴る音響作りを背に向けている点、シューマンの音楽にふさわしい解釈と思う。

神崎一雄 ● Kazuo Kanzaki

【録音評】ケルンのフィルハーモニーにおける2015年2、3月の3回の収録だが、日時が近接しており場所と録音クルーが同じであることによって、アルバムとしてのサウンドに統一感があるのが印象的。空間の響きをはとよく生かしたオーケストラ音場の豊かな展開やほどよいソロのクローズ・アップが、スケール感と爽快感と呼ぶが、これが全編で保持されていて安定感が高い。〈90〉

も、管弦楽の色彩に特異な突出を与える存在としてとらえているようだ。独奏者たちは雄弁な管弦楽に乗って、ときに音を割り、ときにくすんだ色合いでアンサンブルを合わせ、さまざまな音色を作っていく。そうした合奏についての考え方が興味深い。